

【アレルギーマーチの今日的考え方 (pros and cons)】

小児アトピー性皮膚炎の長期予後

出典	アレルギー・免疫(1344-6932)11巻6号 Page786-792(2004.05) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004269612)
著者	古江増隆
調査地域	北海道、岩手県、東京都、千葉県、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県
調査時期	2000~2002年
調査対象	生後4か月、1歳半、3歳、小学1年生、小学6年生、大学1年生
依頼数	記載なし
診断方法	医師による診察
有症率	生後4か月： 12.8% 1歳半： 9.8% 3歳： 13.2% 小学1年生： 11.8% 小学6年生： 10.6% 大学1年生： 8.2%
調査概要	2000~2002年に厚生労働省研究班検診によるアトピー性皮膚炎の有症率は4か月児;12.8%、1歳半児;9.8%、3歳児;13.2%、小学1年児;11.8%、小学6年児;10.6%、大学1年生;8.2%であり、3歳時にピークを認めた。全体像としては加齢と共に警戒する傾向がある。生後4か月時までに発症したADの多くは1歳半までに治癒するケースが多い。一方で生後4か月以降に発症するケースも多いため全体として3歳時あたりが有病率のピークとなる。その他に再発例や10代後半~20歳以上になってから初発してくる症例もいる。